

『私の終戦の思い出』

高宮 鉄 三

私が比島から帰国したのは、農業技術者の雇い入れを兼ねた私自身の養生のためであった。多忙な職務で幾分休養すべきだという医師の勧告があったためで、昭和十九年の五月であった。帰国に際しては、輸送船で帰る予定であったが、軍属であったため、特に飛行便を許可してくれたのは大変有難かった。船で帰っていたらその輸送船団は、三隻の内二隻がマニラ湾口のコレヒドール島付近で米潜水艦に撃沈され、残る一隻はマニラ湾に引き返していた。

今までの勝ち戦に酔っていた我々も、ガダルカナルの撤退(昭和十八年二月)、山本連合艦隊司令長官の戦死(昭和十八年四月十八日)、日本近海への米潜水艦の徘徊、米空軍基地の南支への進出等、だんだんと身近な所まで押され気味の戦況に、誰も口には出ささないが危惧の念を抱いていた。

私の乗った軽爆改造の飛行機(轟山)は九人乗りで、エンジン故障の修理のため、僚機より一時間遅れで出発、

なお台北でも修理のため一泊し、一日遅れて福岡に着いた。途中ホテルや弁当等も、蜀黍の赤飯でおかず等も少なくて粗末だった。台北では白砂糖の飴玉二袋が買えた。内地に運ぶ余裕がないためだとの事だった。ホテルで十人許りの女中さん等のグループに飴玉を袋ごと差し出したが、誰も手を出そうとしないので二個ずつ配つたら、手を合わせて拝むようにして喜ばれたが、殆どの人は懐に入れてしまった。今思うと自分一人で食べるのは勿体ないと、家に持ち帰り子供にやるか料理に使う積りだったのだろう。

佐伯までの汽車での帰路、疎開者らしい親子連れと乗り合わせた。「お母さんお腹が空いたよー」、と三才と五才位の男の子が母親を困らせて泣いている。母親は「もう少しでお婆ちゃんの所に着くからね」と慰めているが、それ位では納まりそうにもない程お腹が空いていたのである。誰も見ているだけで可哀想だった。私は又飴玉を二個ずつ三人に渡したところ、子供はもうなり直ぐ口に入れ、嘘のように泣き止んだ。廻りの人は不思議そうに見つめていた。母親は大変喜んで礼を言い、自分の分はもつたないからと返してくれたが、またお腹

が空いた時にと戻してあげた。親子は大在駅で降りたが、ホームで丁重に頭を下げ続けていた。

ホテルや汽車の中での事で、想像以上の食糧不足、特に糖分不足が逼迫しているようで、誰もが痩せて見え、これで戦争が続けられるのだろうかと少し気掛かりだった。

佐伯駅で下車、輪タクに乗り旅館を探しながら飲食街らしい所、浜丁通りや明石屋旅館付近を廻ってくれたが、どこにも泊れる宿がなく（主食を携行していなかった事もあってか）、最後に車夫はもう普通の宿はありません、宿賃が高い宿でもよかつたらもう一軒ありますとの事。カーキー色の背広にパナマ帽、バック一個に包一個を持った日焼けした田舎男に同情しての宿探しだったのだろう。宿賃の高い旅館は寿賀旅館で、宿の人の話では客は主に軍人・軍属・官吏だとの事だった。

夜、旅館から役場に電話して、私が比島から帰って寿賀旅館に泊っており、明日帰るからと伝えてもらった。

暫くして家から電話があり、思いがけなく長兄から、社用で宇ノ島に出張して来ていて、東京の留守宅からの連絡で、次兄が応召したので浦代に帰っている。明日又宇

ノ島に行くので、佐伯の大手前で会おうとの事であった。翌朝長兄に会い、長兄が東京に帰った頃、私も東京の本社に挨拶に行く事を約束して別れた。

浦代に着くと、腰を曲げた母と次兄の嫁が幼児を抱いて迎えてくれた。次兄は昨日都城に入隊したとの事だった。

その後二日して、次兄は幾分伏目勝ちで淋しそうに裏道から帰って来たので、夢ではないかと驚いた。身体検査に失格しての帰省であった。

その後、長兄が東京に帰る前日再び浦代に寄り、一度は入隊した次兄も家に戻り、比島から不意に帰国した私の三人が、偶然にも会う事が出来たのは奇跡的だと思えた。東京に帰る長兄を送って、兄弟三人と母の四人が佐伯で記念撮影をした。あまりの偶然であったので、「人生万事塞翁が馬」と少し後の事を心配した。

戦は日に日に激しさを増し、こんな小村までも敵艦戦機の攻撃があり、B29爆撃機が殆んど毎日、日野浦峠すれすれに大都市爆撃に向かうのが見え、戦が愈々身辺に迫るのをひしひしと感じるようになった。近い内に敵が九州に上陸するとのデマが飛び、戦々恐々の日が続いた。

我が家では万一に備えて、僅かの食器と鍋釜、それに長年蓄えて来た麦五俵と芋の切干等を、風呂水溜の壺をセメントで補修した中に入れ、蓋もコンクリートにし、爆撃とその火災に備えた。ある日、母が心配して蓋を開けて見ると、貴重な麦の凡そ三分の一位が発芽していて、これを天日で干し上げるのに大変だった。補修した壺に大潮のため塩水が浸水したためで、今でも勿体なく残念に思う。

松浦で在郷軍人の点呼があつた日、私は帰国の折に着ていたカーキ色の背広で参加したところ、若い憲兵が来て、これは米軍の着る服だと文句をつけた。私は一時帰国者で外に着るものが無いと言つと、弁解無用と許り「何！」と、手を振り上げた。すかさず村長が「養生のため一時帰国しているが無理をして点呼に出ている」と、弁解してくれたので助かった。不利な戦況に心が苛立ち、こんなことにも怒りが燃えたのであろう。その時の情けなさ、今も時々思い出される。

その後、レイテ沖の海戦(昭和十九年七月二十日)、米軍の沖縄上陸(昭和二十年四月一日)、ソ連の一方的な不可侵条約破棄と参戦(昭和二十年八月九日)、国内では学

童の集団疎開(昭和十九年八月)が始まり、東京空襲(B 29昭和十九年十一月一日)、村の沖合いで敵機の銃撃により漁師が死亡、人家も二・三度銃撃を受けたが、幸いにも負傷者は出なかった。

沖縄では守備隊が全滅(昭和二十年六月二十三日)、大分空襲(昭和二十年七月十七日)、遂に広島に原爆投下(昭和二十年八月六日)、続く長崎への投下(昭和二十年八月九日)等々敵の矢継ぎ早の攻撃が身辺に迫り、如何なる神風、神国と雖も八方塞がりのこの様は、私共でさえ、最早最後が来たかと悲壮な日々であつた。

八月十四日、役場からの知らせで明十五日の昼、ラジオで重大な知らせがあるとの事。その日は夫々ラジオのある家のそばで待っていると、天皇陛下の終戦の詔勅が伝わつて来た。失礼な事ではあるが、あまり聞き慣れぬ声の抑揚とお言葉、それにラジオの音声が良くなかつたので、良く聞きとれなかつたが、戦争に敗けた事だけは分つた。あまりの事に呆然自失、家に帰つて次第に涙がこみ上げて来て何もする気色がなく、唯ポーツ！とした日々が続いた。